

小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

5. プロセスの進化(深化)と「性的」問題

尾上 明代

このマガジンでは、被虐待児たちへのドラマセラピー治療について、A 児童養護施設で継続的に行った事例を連載している。具体的なプロセスの提示を通して、ドラマセラピーという「対人援助」法について知っていただければと考えている。(各子どもの家庭状況と合わせて、その子どもの即興ドラマを考察すると、その意味がより良く理解できるのだが、それらの記述は割愛する。)

イチゴちゃん、リンゴちゃん、アンズちゃん、マツオ君、スギオ君、という5人の小さな「怪獣たち」と開始した連続セッション。前号では、主にイチゴちゃんの変化と、グループ全体の成長という点で、大きな前進があったことについて記述した。

きょうは大きな流れとして、子どもたちとのプロセスがさらに進化する様子、その一方で浮上してきたセッション内での「性的」な言動について記述する。数回のセッションを重ねてきて、小さな「怪獣たち」は、主に他者をひどくいじめる感情を表現し続けたが、今号の6-9回では、それが確実に収束してきた。五人のこれまでの環境や今の状態が違うので、全員同じように進むのは難しいが、それでも数々のドラマを楽しみながら、グループとして良い方向に前進してきた。・・・というところで、当

然ながら、一難去ってまた一難である。「怪獣たち」がくれた次なる「攻撃(?)」は「性的」問題であった。

* * *

第六回セッション

再び床屋のドラマ!

前回ヒットした「床屋のドラマ」(床屋が、私扮する若い男の客を変な髪型にし、その男が翌日小学校へ行って子どもたちにバカにされるというプロット)をまず行う。浩二さん(助手の施設職員)に床屋になってほしい、と子どもたちの「浩二さん、浩二さん!」コールが起きる。

浩二さんは、彼らのリクエストに沿って「ぼけた爺さん」「ぼけた婆さん」「ぼけた曾爺さん」の床屋を演じる。「ぼけている」ゆえに、手元が狂って客の髪型がどんどん変になっていくという部分は、浩二さんの創作だ。三回ともほとんど同じストーリーだが、この「繰り返し」は、セラピーでは大変重要である。ごく簡単に説明すると、例えば苦しい場面や悲しい場面は、繰り返しながら螺旋的に上昇することで、やがてそこから抜けだし、新しい解決方向へ発展していく。(ただし、対象者の状況や感情レベルを見ながら、負の感情が強化されすぎ

ないよう、ドラマセラピストが導いていかなくてはならない)。また今回の床屋のような楽しい場面は、みんなが一緒に繰り返すことで、良い気分が協力・信頼関係を増強させるプロセスになる。

散髪場面が終わると、毎回すぐに子どもたちは、待ってましたとばかりに、「キンコンカンコーン」とコーラスして（ここがみんな大好き！）、学校の場面を作り、男を見て「きもーい！」と笑う。誰かをいじめるというエネルギーは減り、みんなで共通の目的に向かって団結しているのが楽しいようだ。

4回目には、イチゴが床屋になると言い、男は五千円も払ったのに、怪我させられたあげく、ひどい髪型にされた。「ひどーい！きもーい！」とみんなも大騒ぎ。アンズが「こわーい、父ちゃん」と言って男を見て逃げる演技をした。彼女はそれまで、ほとんどが「その他大勢」としてそこにいるだけで、突出したせりふを言ったことはなかった。「どさくさに紛れて」父親に頼るような言動を表現してくれたのは、印象的だった。実はアンズにとって父親は、大変重要な人物なのだ。

その後、警察が来て、何故か男は捕まり牢屋に入れられた。「ひどい。髪型が変なだけで牢屋に入れられた。」と私（男）が言って、そのドラマを終えた。

マツオ（自転車屋）と私（子どものお客）

お客：あ、「マツオ自転車」って書いてある。

自転車屋：くださいーい。

自転車屋：分かりました。何がいいですか？

お客：子どものお小遣いで買えるやつ。

これまでマツオは、逃げ腰だったり、ふ

ざけたり、攻撃的だったり、なかなか普通にしゃべってくれなかったが、彼のセリフ回しが、これほど「まとも」なのは初めてだった。自転車屋が、お客のほしい自転車の値段は「100万円」だと言うので、高すぎて買えないでいると、そこに億万長者と称する人（イチゴ）が飛び入りで出てきて、これ見よがしに（？）即金で買ってすーっと乗って行ってしまった。すごく楽しそうに。（私は相変わらず、貧乏くじを引くような、やられる役ではあるが、いじめられることはなかった。）彼女らのエネルギーが善意的になった感じを受ける。

リングとアンズの「ソーセージ屋」

二人がセットで出てくる。アンズは誰かにくっついてやるだけで、私とはメインで対峙することはない。（前回、初めて私と二人で行う即興ドラマに出てきたのは進歩であったが、私との接点はないまま、眠っているだけの隣家の人を演じたのみであった。）アンズは必ずリングと一緒に出てくる。性的なジョークも、この二人が一番するし、その点でも気が合っているらしい。二人はソーセージ屋。「浩二さんのおちんちんをいっばい、何十本も（やきとり屋のように）焼いて」売っていた。私は買って食べる場面をやらされる。

このころから、まるで強迫観念のように、セッション内での性的な言動が頻発するようになる。ドラマの中、そして想像の時間には、みんなが性器や性的行為を表すことばを発する。私は、子どもとしての単なるおふざけのレベルと、それを超えているものを、見極めようと努力しながら、頭ごな

しに否定しない（つまり、これまで通りドラマ内では、受け入れる）という基本姿勢は保ったままで、一方ではどうしたものかと悩んでいた。施設入所前の子どもたちの生活史に関する情報を整理するとともに、職員と話し合ったり、また何より大切な、今目の前にいる子どもが発している感情・様子・雰囲気から自分が感じることに、それまで以上に集中した。

想像力・創造力の重要性とセラピーにおける効果

クールダウン（セラピーのクロージャー）の時間は毎回、まず部屋を暗くして床に寝転び、目を閉じて「想像」の世界に行くように導いている。

想像力や空想の遊びがどれほど大切かは、ユングを初め、歴代の心理療法家たちが、多くの論考を提供してくれているので、今更述べるまでもない。

芸術療法、特にドラマセラピーにおいては、そもそもドラマという架空の設定で行う方法が、想像力なしでは成り立たないという性質上、被虐待児など特に想像力が乏しい対象者には、それを開発することと平行してセラピーを行うことは必須である。ある子どもが、想像できるかどうかと、ドラマを楽しんでできるかどうかは、ピッタリと一致する。そして、想像できるようになると、即興でドラマが創れるようになる——つまり今度は創造力がつくのである。（日本語の音が同じなのは、偶然とは思えない。）そして、この創造力こそ、治療の鍵、そして人間の魂が癒される鍵だと強く確信している。

何か新しいことを生み出す・創造するこ

とができたとき、人はとても良い気分になる。ドラマを創るアイデアを出したり演じたりして、認められるという成功体験は、たとえば鬱、依存症、神経症など、またセルフ・エスティームの低いクライアントたちに大変良い影響を与え、現実生活での自信につながることを、日々の仕事の中で、リアルに実感している。この楽しさは、「魂が喜ぶ」という形容詞があてはまると感じる。生み出す行為そのものから来るポジティブな感情と、そこに認めてくれる他者の存在があり、楽しさを分かち合う仲間がいるという組み合わせは素晴らしい。子どもの場合で言えば、即興ドラマで自分が創り出したアイデアと演技をみんなに誉められたときの感情は、たとえば算数の九九が言えたとき、漢字の書き取りができたときなどは、まったく違う種類の満足感だ。また認知症が進んでいるとき、施設で初めて描いた絵が認められ、絵の上達とともに症状も改善されることもある。（実話の一つとして、「折梅」という映画がある。）

逆に言えば、このような創造性が十分開発できれば、セラピー・プロセスは半分以上、終わっていると言っても過言ではない。苦しい思いを抱えてセラピーに来た人々は、その苦しみを芸術に変える過程で癒されたり、またその作品そのものが他者を癒すものとなる。ベートーベンが聴力を失ったあとに創った第九・喜びの歌をここで例に挙げずとも、歴史上の偉大な芸術作品はすべて作者の苦しみの所産と言える。

ところで6月、トラウマと心のケアの世界的権威と言われているボストン大学のベセル・ヴァン・デア・コルク氏の講演を聴く機会があった。その中で特に印象に残っ

た話がある。911テロのときに惨状を目の当たりにしてトラウマを受けた子ども（直後に両親に保護され、ケアされた子ども）に二週間後に絵を描かせると、テロ時のWTCビルの様子を描いたという。ビルの下に描かれているものが、何かわからず質問すると、子どもは、「トランポリン。これがあるときあったら、多くの人たちが助かったのに」と答えたそうだ。ヴァン・デア・コルク氏は、「このような創造性が出ていけば、この子はもう大丈夫」と判断したと述べた。そして、「創造性を創ることも、トラウマを受けた人にとって大切なので、自分はドラマも取り入れている」とのことだった。このように、ドラマが創造性を刺激し発現させる力を彼も利用していることがわかった。

話をA施設に戻そう。とにかくこの5人の子どもたちには、何とか想像力を使うような場面設定にして、その力を呼び起こしてもらおうと、クールダウンの活動には、必ず「想像の時間」を取り入れていたのだ。

この日、特に印象に残ったのは、いつも目を閉じて一番良く想像ができるイチゴが、目を開いたままだったことだ。アイスクャンディーをなめる動作。性的な行為を意図しており、「わかる？」とマツオを見て、二人でニヤッと合っていた。

その後の一人ずつの感想の時間は、前回にも増して、大変「まとも」で、誰のどこが面白かったかきちんと言ひ合うことができた。もちろんその都度、私も同意したり褒めたりした。この時間だけ取りあげれば、まるで私が彼らの「性的」言動に悩んでいたことと逆行するように、今日は非常に大きな向上・変化を感じた日であった！

第七回セッション

私が夏休みをとったため、いつもより間隔が空いたことと、施設の都合で普段と違うホールだったので、彼らはいつもより解放された雰囲気でもとまらない。でも、「今日ドラマやる気ある人？」と聞くと、みんなは「はい！」と言っていたので、楽しみにしていたのだろう。

これまで架空の設定のドラマを続けてきたが、そろそろ現実的な場面も取り入れてみようと思い、実際に夏休みの出来事を話してもらってそれをドラマにしてみようという提案した。現実をドラマに取り入れることによって、その先、彼らの現実の問題を直接扱えるようになるかもしれないという期待があったからだ。浩二さんと私が具体的な例を演じて方法を伝えた。しかし、子どもたちの反応は鈍く、誰も夏休みの出来事を言ってくれなかった。その後のセッションでも、何回か架空から現実に近いと意図したことがあったが、目に見えない抵抗を感じた。このグループでは、結局最後まで、架空のドラマが貫かれた。

対象者がどのようなクライアントであれ、現実的な題材をドラマで扱わなくてはいけない、ということは実は全くなく、それを無理にさせる必要もない。対象者の状況や性向、希望、セッションの目的によっては取り入れることもあるが、むしろ架空のメタフォリックなドラマを扱うことこそ、本来のドラマセラピーの意図である。

それで、この日はある程度子どもたちに任せてみた。当時、子どもの中で流行っていたテレビドラマの場面を、イチゴが中心に

なり、みんなは楽しんで演じていた。私だけそのドラマを見たことがなかったので、一人で観客になっていると、リンゴやマツオが、何でも適当にやればいいからドラマに入れ、という。私も一緒にやって欲しいという気持ちだと思い、すなおに嬉しく感じた。少し一緒に演じたあと、次回セッションまでに、そのドラマを見ておくことを約束して終わる。

誰からともなく、学校で練習している運動会の応援歌を歌い初め、とても大きな声でのコーラスになった！かなりのエネルギーが発散されたと思う。今回は、夏休みということもあって、不思議と「番外編」のようなセッションだったので、いつものようなプロセスにはならなかったが、ちょっとした息抜きになったように思う。

セラピー後、それぞれの子どもが、施設敷地内にある自分が所属する建物に帰る際、アンズが、「怖いから送って行って」と言う。このような弱音じみた発言は、決してなかった子どもなので、はじめは本気と取らなかったが、真面目に頼んでいることがわかり、しっかり手をつなぎ歩く。アンズとのこのような時間は初めてだ。夜は「後ろが怖い」のだそうだ。それに共感しつつ安心させながら送り届けた。

第八回セッション

またまた床屋

セラピーの部屋も通常に戻り、再びみんなのお気に入りの「床屋」のドラマから始まった。私が床屋、マツオがお客になり、

彼は「チンコの一」というセリフでドラマを始めた。

私は、「チンコは今までいっぱいやったからいいよ。やめようよ。」と、初めて受け入れずに、却下してみた。

もちろん、内的な理由があって、性的な言動が起きていたと思う。だから、当初の何回かは受け入れて、その発展の様子を見ていた。(しかし、そこからただちに、内面や過去の問題点を導き出すようになる段階ではなかった。)とにかくおふざけで話していることでかなりの「負」のエネルギーを発散できているように思えたが、おふざけの形にせよ、何度も吹き出していた。そうになると、繰り返すことによって、その言動が強化・拡大されてしまうばかりで、変化、昇華、収束の方向がすぐには見えなかった。(これまでのエネルギーの発散で良しとして)一端、他の方向へ子どもたちを向けさせたいと思ったのだ。

するとリンゴたちは、そのことには触れず、「明代さんがお客がいい！」と言い、マツオと交代する。結局、ぼけた床屋の爺さん(浩二)とお客(私)で、おなじみのドラマを子どもたちに見せることになった。「キンコンカンコーン！」学校でまた、「キモーイ！」と。みんな楽しそう。イチゴとアンズは「きゃー、マジックだ。眉毛がつながっているよ！」などと、想像的なせりふを言い、マツオは、「カッコイイ！」と言うので、男は「嬉しい！始めてカッコイイって言ってくれた！」と喜んだ。

続いて浩二さんが、「床屋」という苗字の植木屋だった、という筋書きで、私の頭に

作業して、頭上に綺麗な林ができあがり、私が「きれいーいッ！」と言って終わらせた。

読者の方々は、もう飽きてきたのではないかと思うこの床屋のドラマ、ほとんど繰り返しの中で、少しずつ変化しているのをお気づきだろうか。私へのいじめが、明かに消えてきて、さらには肯定的な感情が表れているのを。このように、繰り返すことにより、負の感情が十分に発露され、いつのまにか今までの負の感情の発露対象の存在が相対的に少なくなり、他の面への関心や集中に変化してきている。いわゆる、浄化、昇華につながったとも言える。

テレビドラマ

次に、私が約束通り見て来たテレビドラマの場面をドラマにする。私は学校の先生の役（怖い先生の設定）になったが、みんなは生徒役で、わーわーと楽しそうに騒ぎ、また本気っぽく反抗したりする。私へのいじめの感情が収束してきたのは良かったが、代わりに性的なことへの固執がやはり続いている。たとえば、

イチゴ：先生のおっぱい揉みたい！

私：そんなこと許されません。

アンズ：先生のチンコをー

私：私は女性なのでそんなものはありません。じゃ私は、もう行きます。

マツオ：はい、勝手に行けーっ！！（とても憎らしい感じで）

という具合である。

みんなはこのあと「卒業の歌」を歌う。もうメチャクチャに叫び、動物園みたいな騒ぎだ。とくかく音量がすごい。歌の途中で、みんなは私の記録用のレコーダーのマイクに向かって、チンコをもみもみ、明代

さんのチンコ、おっぱい・・・口々に吹き込んでいた。（私があとで聞くことを知っている。）

初めて叱る

突然、スギオが「明代が交通事故で足をなくして、みんなは医者。手術をする病院。」と提案する。そこで、まず自動車役の子がぶつかってきて、私が倒れる。スギオたちは、大丈夫ですか、と言って私を助け、オペ室へ。机をベッドに見立てて私は寝かされる。みんなで寄ってたかって、私に手術をしている様子である。（私は当然ずっと目をつぶったまま。）すると、私のズボンのチャックを降ろされた。

上述したように、今まで、このようなことばやドラマ内でのアクションについて、ほとんど全てを受容するというスタンスでやってきた。それは、以下のような理由からだった。

- ・私がどこまで受け入れてくれるかのお試し（たとえば、初めのころ、ドラマの流れと全く関係なく「おちんちんと言って」などといわれて、即リクエストに答えていた。）

- ・そのような言葉を言ってストレスを解消（これは一般の大人でも、「くそ畜生！」などと言うことはごく普通にある）

- ・子どもゆえの遊びの一環（ウンコなどということばは子どもは普通に言う。さらにみんなで言い合うのは楽しいという側面がある。性器をことばに出す、などもしかり。）

しかし、だんだん思春期に向かっている歳でもあり、さらに一般の子どもと全く違う家族史、生活史をもっていることを考慮

すると、このような事柄をすべて受容するのは、もちろん良くない。頭ごなしに、それはダメ、それは言うなという方略は採らないが、それに関しては、マイルドに受容を辞めていく必要があった。しかし、前出のマツオに「それはもう辞めようよ」と言った場合とは違い、今度は、チャックをおろすというような現実的な行動に出たわけだから、「ドラマの中では実際にぶったりしない」というお約束に準じて、ここはしっかりいけないことを伝えるときだ。ここを外したら、現実的に行動を起こす可能性まで受容してしまうことになる。

私：(目を開けて素に戻り、かなり本気で叱る) 誰？謝って！

みんな：リンゴ。

私：正直に言って。言ってくれたらいいんだから。本当にリンゴなの・・・？

みんな：・・・。(私が怒ったのを初めて見たからか、神妙な顔つきをしている)

私：じゃ、どうする？このあとどうするかみんなで決めてください！

それ以上、叱ることはしないかわりに、このドラマは中断することをこのような方法で伝え、その後の対処をみんなに委ねた。

マツオ：動物園ごっこ。

私：それでいい人？

みんな：はい。

マツオ：明代さん、飼育係！

動物園のドラマ

叱られた時間は、短時間でも子どもたちにはインパクトがあったと思うので、その後はさっと気持ちを切り替え、マツオの提案を受け入れた。みんなは沢山の椅子を使

って檻を作る。動物園だから当然だが、ぎゃー、ウォーとすごいエネルギーで、全員鳴く！私が追いかける！みんな逃げる！大混乱！

アンズとリンゴは、ゴリラの檻に二人で入って、アンズがリンゴの上に乗って「交尾」していたが、飼育係が来るとすぐ逃げる。浩二さんも飼育係になり、麻酔銃で動物たちを一瞬眠らせる。でも、みんなすぐ起きる。撃たれて一瞬眠る麻酔銃を彼らは大変気に入ったようだ。騒ぎが収拾つかなくなってきたので「止めよう。OK、終わりー！」と私が叫んだすぐあと、下の階にいた事情を知らない人が何事かと入ってきた。みんな、シーンとなる。

その後、アンズが気持ちよさそうに運動会の歌を歌い始めた。みんなは横になり、寝ているところを、一人一人私が足を引っ張って床を滑らせてあげる遊びをした。どの子もキャッキョッと嬉しがって、幸せそうだった。特にマツオが一番喜んだ。

絆ができる

「じゃー寝よう。たまには、チンコじゃないことも考えて。いつもそれじゃつまんなよー。」意図的に方向を変えるために、この発言で、私は再び介入した。そして、今日初めて用意してきた「コロは屋根の上」(子どもらしい歌詞のかわいい歌)のCDを流す。この子たちにはウケないかも・・・「何こんな歌！」なんて言われるかも、と内心思っていたのだが、彼らが静かに落ち着いたことに少し驚く。今日は、今までで一番、ギャーギャー大声をいっぱい出して、発散できたからかもしれない。何が奏功したの

かは、断定できないが、初めて彼らの心身が落ち着いているところを見た気がする。

以下は、この日の彼らの想像の中身である。ここでも私は、いつも当然ながら、どの子のどの発言も基本的には何のジャッジもせず受け入れ、ごく自然な雰囲気で見守る。

マツオ：俺が、金持ちになった。

私：あー、いいねー。お金持ちになったんだ。

スギオ：おれ貧乏の生活している夢。

リンゴ：ピッカピカの家。

イチゴ：自分の好きなものに変身して、鳥になって空飛んで、野原に行った。

アンズ：何にもない。

私：何にもない、っていうのもいいねー。

アンズだけは、やはり想像させることが一番難しい。スギオも、やはり難しい子どもである。今回はマツオのことばに反応して発言したが、本当に「想像した」とは考えにくい。

一番良かったところの感想としては、やはり「動物園」で逃げ出して騒いだところと言う子が多かったが、リンゴは、何と「チャック降ろしたところ。」と言ったのだった。

私：(優しく) やっぱりそうなの!? 正直でよろしい。許してあげる。

リンゴ：別に許してくれなくていいよ。

私：(リンゴが照れ隠しで言ったのがわかったのでニコニコと) そんなこと言っちゃって～。

するとアンズが、とても落ち着いた平和な感じで「自分が初めにやった。」と話してくれた。

私が「二人とも正直でよろしい。二人とも

偉い！褒めてあげる。」と言うと、僕たちもやった、俺も・・・とみんなが言い始めたのだ。嬉しい気持ちが静かにこみ上げてきた。リンゴとアンズが、少し私に近づいてきたというか、この出来事で、絆が少しできたように感じる。

帰るとき、マツオが初めて「明代さん、ありがとう。」といったので、浩二さんが「あの子がお礼を言うなんて」と驚いていた。足を引っぱってあげる遊びがよっぽど楽しかったのだろうか。

そして、この回以降、動物園のドラマが大流行し、毎回セッションのお約束となったのは、言うまでもない・・・！

第九回セッション

絵のドラマ化

マツオが体調不調で欠席したので、他の四人と行った。

きょうは、気分転換の意味も込めて、床に敷いた巨大な模造紙に、みんなで絵を描くことから始めた。それぞれが自分の好きなものを好きなところに描き、その後、人の描いた絵も見て、一緒に書き足したりしても良いと伝えた。特にイチゴやリンゴはとても嬉しそうだった。それぞれが描けたら、浩二さんと私も含めて、一人ずつ説明する。私は太陽と7つのハートを象徴的に描いて、「ドラマセラピーを7人で楽しくやっているところ」と説明した。

特にアンズの発言に興味を惹かれた。大きなウンコ、ゼリーがなっている木、虫を描いたのだが、それぞれの間の関係はないというのだ。たとえば、「この木の下に虫が来てウンコした」などのような、絵と絵の

関係を知りたかったのだが、何度聞いても「知らねー」とか「ない！」と答える。しかし最後には「浩二さんの描いたロケットと関係がある」と言う。彼女は誰とも関係を持ちたくないが、唯一、浩二さんとは持ちたいのである。(浩二さんは、とにかくどの子どもにも人気のある職員なのだ。)彼女が私との一対一のドラマに初めて出て来た前回も、隣の家の人の役として単に眠っているだけで、私とは一切関係を持たなかった(持ちたくなかった)のと同じことに思える。

スギオは、やはり彼のドラマと同じように、創造的ではなく、人の真似をして描いたり、描くことそのもの(表現すること)に気が進まないようだったが、最後に、アンズの描いたウンコの上方に、それを今まさに踏もうとしている人の足を描いた。その発想が面白くて個性的、と指摘して褒める。全体的にどの子どもの話もいつも通り、何もジャッジせずに共感的、支持的、ポジティブに聞いた。

そこからみんなでストーリーを創って演じようというのが、私の意図だった。しかし、目の前にある絵(限定された材料)を使ってストーリーを協力して創るのは、彼らにとっては難しかった。私は自分も演じながら優しく導き、結局ほとんど全部に介入してやっとできたというものだった。

6人の役:

モグラのおばあさんーイチゴ、
毛虫のケムパスースギオ、
スーパーウンチ君(イチゴが創ったキャラクター)ーリンゴ、
犬ーアンズ、
ロケットの花ー浩二、

少年ー私

モグラのおばあさんが種を見つけて埋める。(ここはイチゴが創った。良いスタートである。)ロケット花が咲き、通りがかりのケムパスが出てくる。そこに犬が来てウンコする。少年が来て、それを踏んじやって大騒ぎする。小川が流れていてそこで洗ってハッピーエンド!

プロットは至ってシンプルであるが、絵も含めて、初めてみんなで創りあげたドラマであった。大盛り上がり、というほどではなかったが、みんなで落ち着いて行い、結構楽しく出来たことを考えると、実はとても良かったと思う!私が驚いたのは、このような「まるで子どもらしい」ドラマが、この子たちとみんなで作れたことだ。殺しや攻撃やいじめも一切出て来ないドラマ。それにしても、ウンコを私が踏むというところまでストーリーが進んだのに、一向にそれ以上私が惨めになるような流れにはならなかった。それどころかウンコには無反応だった。(特にイチゴの)いじめエネルギーは消失した(出切った)ようにも思われる。

絵を描かせたこと自体も良かった。(子どもも楽しんだし、そこから私がそれぞれの子どもの傾向を確認できた。)

やはり動物園

結局、このあと「動物園タイム!」になる。

トラの夫婦(リンゴとアンズ)、象→いつしかワニ(スギオ)、カラカル(イチゴ)というふうに、凶暴な動物が多い。アンズはやはりどうしても単体ではいられず、誰かと一緒(夫婦)である。みんなが檻から逃げ

たり、浩二さんと私が飼育係になって捕まえようとしたり、えさをやったり麻醉銃で撃ったり、前回と同じことが繰り返された。お絵描きのときに床を保護するために敷いた大きなビニールシートがあり、みんな逃げてその下に入って隠れるのがすごくワクワク楽しかったようだ。最後は四人が一丸となった。世話係の二人対四人のようになり、彼らは逃げる。と言ってももちろん「追いかけてほしい」「気にしてほしい」「かまってほしい」という意味だ。

ギャー—、ギャー—と叫んで、同じことの繰り返しと大音量に、こちらの大人二人は少々疲れが出て、飽きてきていたが・・・でも彼らはエネルギー発散させた。

このような遊びは、例えば床屋のドラマのストーリーを楽しむのとは、随分違う種類のおもしろさである。一人ずつよりみんな一緒、というのが好きな子どもたちだし、さらに動物になって浩二さんと私からケアしてもらえる、逃げたら捕まえに来てくれる、というのはとても嬉しかったはずだ。セラピストや施設職員としてではなく、「飼育係」として「動物たち」のケアをするという構造が、現実からの距離感があってドラマセラピー的だ。

象になったスギオ（仲良しのマツオが休みでちょっと寂しそうだった）は、ケアしてくれるのは嬉しいようだが、突然、かわいい雰囲気にもまったく似合わない怒鳴り方をする。（マツオにも同じ傾向がある。）「何だ、うるっせー！バカ野郎！」などと怒りを突然ぶつけられると、「可愛いやんちゃな、私を慕っている男の子」というイメージが一瞬で吹っ飛び、その刹那だけ「この子の

中に私を憎んでいる感情があったのか」と思ってしまうことがある。もちろんそれは、明らかに、私を憎んでいるのではなく、彼らは別の人間への感情を出しているにすぎないのだが。（二人の男の子へのケアにはまた課題が多く残っている。）動物、特に獰猛なものになるということは、奇声を発して叫ぶようなこと、また怒りを爆発させることがオフィシャルにできる利点でもあるので、彼らは気に入っているのだろう。

クールダウン

前回から始めた歌の時間に、歌詞を持って行き見せると、みんな集まって歌おうとした！ かわいい、子どもっぽい歌詞の歌を彼らが歌おうとしているのを見ると、今までの言動から感じていたものと違い、かえって意外な印象を受けた。彼らの「攻撃」や「性的言動」にドラマの中で直接関わってきている私としては、本来の「子ども」としての感情や生活の体験が乏しかった彼らが、「子どもみたいな歌」を「子どもみたくに」進んで歌おうとしているのを見るのは、感慨深いものがあった。

この日の想像の時間は、イチゴの発言から始まった。（私は、また現実に引き戻される。）

「さあ、きんたまの夢、行こうかな。」
私：自由だけど、なるべくきんたま以外にしてよ。」

前回の想像の時間は、静かに「寝て」いたが、今日はまた、お互いふざけてごろごろ転がったりしていた。イチゴとアンズが、二人で内緒で話合ったのか、「楽しかったね」「チンコの世界に行つてさ」などと言っている。

このあと、イチゴは、性器の名前を使い、それをたこ焼きにして食べた云々と発言した。それに続き、アンズは、ある具体的で特殊な性行為の様子を「想像の世界」の名の下に、話し始めた。さらに続けて、「私はセックスの村に行ったの。そこではみんなセックスしてるの。」と言う。イチゴもそれに乗って、「そう！そこではうふーん（動作して）とか言ってみんなしてるの。」

まるで、「想像の世界」の話という形なら、私も否定はできないだろう、とばかりに、とどまることを知らない様子である。

アンズ：あとね、良い世界もあった

私：良い世界は？（この時の私のレスポンスの仕方は、内容に対しては、しっかりと中立的な態度を維持しつつ、受容的に優しく、暖かく包み込むように聞いていた。実際、彼女たちが話す中身を聞いて、叱ろうという気持ちはまったく起こらず、また、すぐに口をふさいで辞めさせたいというような気にもならなかった。本当に彼女たちの心と身体を包みこんであげたい感覚だった。）

アンズ：アメリカに行った。

私：あ、えっほんと！？

アンズ：英語でしゃべってね、チンコのこといっぱいしゃべった。チンコの英語しか覚えてないから。

（とうとう他の題材がでてくるのか、と期待したがやはりダメだった。アンズには、私の期待をちゃんと知っていて、ふざけてからかっている気分も入っている。）

リンゴ：チュッチュ（セラピーの見守り役としていつも置いてあるぬいぐるみの名）と一緒に森に行って一緒に食べて終わり。

スギオ：嘘つけー

リンゴは本当にそんな空想をしてくれたのか、それともやはり私をからかって、期待されている“答え”を言ったのか。とっさに私はとても良いとすなおに信じた（そしてその自分の感覚を信じたい。）が、直後にスギオが、嘘つけーと言ったので、スギオの方がリンゴの本当の意図を見抜いたのか。またはスギオ自身がひねくれたことを言ったのか、わからない。

スギオ：何も無い。

なかなか一筋縄では行かないことは、もとよりわかっている。

以前にも書いたが、このころ、毎回のようにアンズの笑い声が気になった。人を馬鹿にしたような、カタカタカタカタというその響きは（もちろん、おかしいよ～という気持ちは表れ出ているが）あまりに均一、画一的でロボットか笑い箱のようだ。ボタンを押すとその笑い方をするだけ、それ以外にはない。自分が本当に友達とふざけて楽しんでいる時も、ドラマの中で私が馬鹿にされているのを見て、あざ笑うときも、自分がエッチな冗談言ってその後笑うときも、全て同じ笑い方。普通は状況に応じて笑い方は変わる。人間らしく変化してほしい。彼女の心からの、機械的に響かない笑い声を聞きたいと思う。

6回目から9回目の4回のセッションでは、内容と行動に顕著な変化が表れた。一つは、攻撃性（人をいじめる、殺すなど）が、明かに減って（子どもによってはほとんど消滅して）いったこと。そしてその分、私の演じる役とみんなの演じる役との間に、

意味のある話しの展開ができはじめた。一方、もう一つは、いじめ、攻撃感情の代わりに、性的な言動の模倣、感情、それへの意識が表面化してきたことだ。それは最初、子ども一人のこだわりの行動、感情であったものが、全体に広がった感じだ。

ここでの受容する度合いには、とても慎重な判断が必要だった。このような題材に関して、共通の「倫理」的感觉をどこに定めるかは難しい。マルキ・ド・サドまで行けば、また別の世界になるが、日本人とヨーロッパ、アメリカとは相当に感覚が異なるし、日本人の中の多様さも同じように広い。そして、「通常的感觉」を超えるのがドラマ、ドラマセラピーであるのだから、一般的倫理での切り捨ては極力避けたい。

「ウンチ、おしっこ」の時は、できるだけ付き合った。しかし、性的なことを直接表現するのは、一定のエネルギーを発散させた後は、一端、休止に持っていくようにした。

どちらも社会では、禁忌とみなされる分野であるが、前者は仮想空間であれば許容できることとし、後者は仮想空間であっても、一定の禁忌性を維持した。

その感情のエネルギーをある程度発露させつつも、包み込んでいく行程はしばらくかかるだろうと思われる。前思春期の子どもたちでもあり、また、家庭・生活環境にも関わっているので、丁寧に扱う必要を強く感じる。

(次号に続く)